会報

〒183－8534
東京都府中市朝日町3-11-1
東京外国語大学
ロシア語渡辺研究室内
東京外語ロシア会
TEL＆FAX 042-330-5265
振替口座 00110-8-22338

ロシア会の〝これから〟

副会長　古茶兵衛

古茶兵衛副会長

昭和初期に開催されたロシア会総会に於いての八杉貞利先生のご説明によれば『…（中略）本会の創立はご承知の如く大正の終わり即ち　その14年でありまして、同年15年8月に会報第1号を発刊した…』とあります。

その頃、満州に旅行された先生は現地に於ける「露語研究熱の未曾有の勃興」に驚かされます。「関東軍と満鉄のあたかもこころを合わせたような露語研究の奨励と厖大な施設」「ハルビン学院の満州大学への昇格」等など。

間もなく露語を学ぶ者の洪水となり、本校（外語）の卒業生がその間にあって、「我校の権威」を維持することが容易ではなくなるであろうと大いに危惧され又、現地満州に比較して情報の不足、並びにそれによる在校生、卒業生の国際常識の欠如を如何に補うか苦慮されて先生は即刻ロシア会の会則の改正を思い立たれ、以下のような提案をされました。

『然し露語部は……（中略）東京外語のただ1個の語部に過ぎないのであり……我が語部のみに対し特別の設備を　当局者に要求するのは……無理かも知れません……さらばと言ってこれを現在の露語教員にのみ要求するのも、之亦無理の注文であります。……ロシアに関する常識と申しますれば、それは広く政治、経済、法律、文化の各方面に関する事でありまして、それぞれ相当の専門知識を要するのであるから、……露西亜語を知ってさえいれば　露西亜の事が分かるなどと思われた時代は既に遠き昔の事であります……幸いにして我が露西亜会員の先輩中にはそれぞれ専門の知識を有し、各部門の露西亜研究に従事される俊秀が山の如くあります。

我らはこの人々の助力に依らずして何に依るべきでありましょうか。……ここに於いてか　我が露西亜会がその本来の目的を発揮して母校の進展に寄与すべきも正にこの時であると言う結論に達するのであります。

従来の「会員相互の親睦助力を図る」と云う月並みにして微温的な文句の上に、「母校露語部の進展に寄与するを以って目的とす」と云う最明確にして力ある表現を付加したいと存ずる所以であります。……必ずや会員の衆知を集め、その各人のイニシアチーブによって活動を開始せねばならぬと思ふのであります……』

今から70有余年前に述べられた八杉先生のお言葉は力強く然も今の世にもそのまま当てはまることに私は驚き、感銘を深くしております。

例えば文中「我校の権威」を「我校のプライド」と書き換えますと先生の我がロシア語科卒業生に対する並々ならぬ愛情が伝わって参ります。

近年学校間の競争は更に激化しつつあります。曰く、偏差値、合格難易度、卒業後の就職率等々、この度文部科学省は大学の独立法人化を企図し、上位30校のしぼりこみや大学の統合、合理化によるコスト削減と更なる淘汰を計るとのことです。経済成長の失速と少子化現象から考えて止むを得ない措置なのでしょう。

外語大もその教育ビジョン、特色、教授内容、今までの実績等さまざまな角度から鋭い検討が加えられることでしょう。

幸いにして本校はこのきびしい時期にもかかわらず、21世紀にふさわしい新校舎を与えられました。オープニングキャンパスに於いてもビジターから確かな手応えを得られている由、喜ばしく思っております。

然し問題はその中味であり、八杉先生がいみじくも70余年前に指摘されたように国際感覚の豊かな常識ある子弟の教育を語学教師にのみゆだねることは無理です。多くの方々がそれに気付いていながら抜本的対策が立てられていないことが気がかりです。

ここは矢張り政治、経済、法律、文化の各方面でご活躍中のロシア会の先輩と先生、学生が三者一体となって、母校の進展に寄与することでこの難局を乗り切って行くことが得策と考えます。

一般に人気の高い私大を例に取りますとそこには必ず創始者の創学の精神が卒業生、学生の中に、脈々と生きており、それを中心として同窓会、大学理事会、学生が一団となって大学の運営に寄与しております。残念ながら国立の我が校には創立者個人はおりませんが、ロシア語の父とも云うべき八杉貞利先生の創られたロシア会があります。

どうか卒業生の皆様にはロシア会をもっと身近なものに感じて頂きロシア会を通じて母校をバックアップして頂きたいのです。具体的に問題を提起して頂ければありがたいのです。

蟹は甲羅に似せて穴を掘ると申しますが人も生涯かけて作り上げた穴の中は多分心地よくて晩年になるとその中に閉じこもって一歩も外に出ようとしない方が多く見受けられます。

時々はロシア会に姿を見せて下さい。心を開けば新鮮な出会いがありますよ。

（昭25年卒）

目　次

ロシア会の〝これから〟　1
追悼和久利誓一先生　2
和久利先生主要業績　2
府中だより　4
ロシア会会計諸報告　5
プーチンのロシア再見　6
垣根を越えた「市民学会日本とロシア」　7
アドリア海（クロアチア領）再訪　7
二〇〇一年度ロシア会のお知らせ　8

追悼　和久利誓一先生

辛寿を祝う会で
2000年11月19日

生涯、ロシア語・ロシア文学の研究と教育に情熱を注がれた和久利誓一先生が本年五月五日に逝去されました。心からご冥福を祈ります。

弔辞

和久利先生、先生は一生を通じて日本でのロシア語の普及と、さらに進んで文法の指導と研究に非常な精力を注ぎこんでこられました。有名な『ロシア語四週間』は現在も多くの教育機関で用いられており、また久しく改訂されずにきたために訳語、例文共に古くなった『岩波版露和辞典』を飯田規和、新田実両教授との共同編集という形で『岩波ロシア語辞典』に生き返らせました。

先生はまた文学にご造詣が深く、日本ロシア文学会会長をお務めになられました。ゴーリキーの『二十六人の男と一人の娘』や『文学論』をはじめとして、ブーニン、クプリーン、グラトコフ、ロマーノフ、ネヴェーロフ、ピリニャーク、イワーノフなど十九世紀末から二十世紀初頭にかけての様々な作家を紹介していらっしゃいます。さらにわが国の少年少女にロシア文学を読ませようという熱意は大変なものでした。先生の編集なさった『少年少女世界の名作文学』に収録されているのはバイコフ『偉大なイワン』、マルシャーク『十二月物語』などきわめてユニークな作品ばかりです。先生は博学で革命前のロシアの労働者や農民の苦しい生活をしらべ、そうした社会的背景を熟知した上で作品の翻訳、紹介に向かうところにロシア文学に対する先生の基本的な姿勢があったといってよいでしょう。

近年はご体調がすぐれぬようでしたが、記憶力抜群で『東京外国語大学史』出版に際し、先生の知識と豊富な資料にどれほど助けられたか分かりません。

昨年、ロシア会で先生の卒寿をお祝いした折に、おみ足こそご不自由ではありましたが、たいへんお元気で皆を喜ばせて下さいました。

あまりにも突然のご訃報のゆえ、いまだに信じかねる思いです。

ここにあらためて先生のご造詣に対する敬意と長年にわたる学校に対するご貢献に感謝を表して、先生の安らかなご冥福をお祈りする言葉にかえます。　合掌

平成十三年五月十二日
東京外国語大学ロシア会会長
原　卓也

和久利君の思い出

東郷正延

『岩波版露和辞典』が出たのは一九三五（昭和十）年で私が卒業して四年後。在学中に利用出来なかった悔しさが今も忘れられない。それから二十五年後その改訂版ともいうべき『岩波ロシヤ語辞典』が刊行され、私も推薦文を書いたというので天金の豪華な机上版（当時で定価七千円！）を寄贈された。重さ四キロ半もあるものを今取りだして序文を読んでみると文末に東京外大助教授和久利誓一、早大助教授小川利治の両君のご援助に対する感謝の言葉が述べられている。これでも分かるように和久利君は恩師八杉先生のためならどのような援助も惜しまなかった。その最大の御恩返しが『岩波ロシア語辞典』改訂増補版の刊行（一九九二年）であろう。

ところで和久利君の生涯を表現するのに何かいい言葉がないかと考えていたらある時ふといいことを思いついた。昭和十年版の旧版でも同じだったと思うが、いま昭和三十五年版の『岩波ロシヤ語辞典』でучить、-сяのところを開くと〈век живи—век учись［諺］学びて止まず棺を被ってすなわち止む〉というのが出ている。うん、これだ！　彼の一生をひとことで表すとしたらこれ以外にない！と考えたら短文の中で何を書こうかという迷いから解放されてほっとした。

余白を利用して在職中の想い出を書いておく。石山正三君の同級生が福島県五色（ごしき）沼近くの観光ホテルのトップの座にいるとかで珍しく職員旅行（二泊三日）をした思い出。原君も磯谷君も、そして岡田進君もまだ若かった。また大月書店がレーニン全集の刊行に踏切ることになり外語にも一冊が割り当てられた。そこで石山・和久利・東郷の三人で分担訳出してその責を果たしたのも今はなつかしい思い出となった。

今はただ君のご冥福を祈るばかりである。（昭6年卒。東京ロシア語学院学院長）

「露伴居士」のこと

早川　徹

五月十二日、晩い午後の中

和久利先生主要業績一覧

（関西大学　近藤昌夫助教授による）

一　編著書

『図解ロシヤ語入門』（編著）　白水社　一九五一年九月
『ナウカ・ロシヤ語新講座』4　ナウカ社　同年九月
『ロシヤ語変化全表』　大学書林　一九五六年
『テーブル式ロシヤ語便覧』　評論社　一九六〇年
『ロシア語四週間』　大学書林　一九六一年
『入門ロシア語文法』　白水社　一九六三年
『大学書林ロシヤ語小辞典』（編著）　大学書林　一九六四年
『ろしあ路』（共著）　図書新聞社　一九六七年
『新県居雑記』（共著）　吾妻書房　一九七〇年
『岩波ロシア語辞典』（編著）　岩波書店　一九九二年六月
『小川水明歌集』（編著）　短歌新聞社　一九九七年五月

二　論文

「ソ同盟諸民族の文学（1）」
「ロシア文学研究」4　一九四九年
「グラトコフ——注目される世界の作家」
「早稲田文学」17　一九五二年
「ソヴェート社会主義リアリズム」「文学界」7　一九五三年
「ゴーリキー百年祭を機会に
——『どん底』についての雑感」「テアトロ」一九六八年
「恩師の温情——八杉先生の葉書」「窓」一九七九年
「学会30年史覚え書き：草創の頃」
「ロシア語ロシア文学研究」一九八一年
「3ЕФИРの想い出」「窓」二〇〇〇年

三　書評

「『文法辞典』の有難さ」「窓」一九七九年
「『ロシア語表現辞典』について」「窓」一九八三年
ロシアの「広辞苑」——「ロシア語詳解大辞典」БТС
「窓」一九九九年

野坂上の宝仙寺。金欄に蔽われた和久利君の骨壷と並べて、明るく笑っている温顔の大きな遺影。「精進落ち」の席で私たちは時折不謹慎な声をあげながら故人の思い出話にふけっていた。弔辞を読んでくれた東郷正延、原卓也、米川哲夫、『岩波ロシア語辞典』の協力者の新田実など故人と縁の深かった同窓の先輩、後輩の諸兄ばかりの席だった。話し声の中から私はふと起って、焼香机の処へ行って、新しい線香を加えた。いつの間にか新しい白木の位牌が置かれている。九字の戒名の一番下の四文字が眼に映った。「露伴居士」。幸田露伴？と一瞬訝ったが直ぐ判った。彼の一生を象徴するおくり名としてこれ以上のはない。

昭和九年卒予定の私は二年休学して十一年卒のクラスに復学した。故人と知り合ったのはそのときだから、彼とは七十年あまりの付き合いになった。生来温厚篤実な彼は生意気盛りの私に特別な印象を与えなかった。昭九卒組は学生ストのときクラスが半減するほどの退学処分を受けたくらいだから、強烈な個性の持ち主が多かった。昭十一卒組はみな温順な学生ばかりだったが、その中でも和久利君は最も温良な勉強家で、主任教授八杉貞利氏の信頼が厚かった。多分将来は母校で八杉教授の衣鉢を継ぐことになるだろうと級友間の噂だったが、その後の彼の一生を辿ると、その予想は的中した。彼は八杉教授の名著『岩波版露語辞典』の編纂を扶け八杉氏の死後はその補遺作業の中心となり、遂にライフワークとなった彼自身の『岩波ロシア語辞典』を完成して死んだ。文字通り露西亜語を伴（とも）とした一生であった。彼の話題は常に露語であった。入院中「書き込み」の細い紙片を無数に挿んだ辞典を片手で振り回して、見舞った私を辟易させた病床の彼の顔は、なにか「モノ」に憑かれた人間の一心が凝固したような顔で、美しくさえあった。名実ともにかれは「露伴居士」であった。

（昭11年卒。元読売新聞モスクワ支局長・外報部長）

夢多きロシア語の使徒

新田　実

亡くなる八日前の四月二七日に私は和久利先生からお電話を頂いた。二月に亡くなったナウカ社の雨宮潔さんの「偲ぶ会」がどんな様子だったかを尋ねられたが、話題はすぐに「文法」に移った。「近頃は寝ていても苦しくなってねえ」とおっしゃりながらも「アカデミアの文法を読んでいると実に面白いよ、いろんな事が書いてあって」。いわゆる「八〇年文法」のことだった。確かに先生の息づかいはお苦しそうだったけれど、まだまだ大丈夫だと私には感じられたのだが……。

旧ソ連邦アカデミアの通称「六〇年文法」を簡明正確にダイジェストしたものとして今日まで四〇年もその生命を保ってきた『テーブル式ロシア語便覧』（評論社）は名著であり、先生の業績の白眉とも言える。「七〇年文法」の反省の上に立って、規範性と便覧性を再度付与してできた「八〇年文法」を自家薬籠中の物にしてご自分の『便覧』を改訂なさることが、恐らく先生の大きな夢の一つだったのだろう。

師の八杉貞利先生の衣鉢を継いで、岩波露和辞典の第三世代と称される『岩波ロシア語辞典』を主編者として完成されたことは、先生の最大の業績とみなされている。私も友人の飯田規和氏と共に編者の一人に加えて頂く光栄を得た。だが私には、六〇年に出た八杉貞利著『岩波ロシヤ語辞典』の編纂、増訂版の作成、その後の丹念な訂正作業に長く献身的に勤しまれた和久利先生のお姿にこそ、先生の偉さ、真骨頂を感じている。事実をゆるがせにせず、克明に調べ上げる。こういう先生の姿が、辞書編纂の十数年の中で私の目に焼き付いた。「ロシヤ会」の会計と会報編集の仕事をこつこつとやっておられた先生の姿がこれに重なる。三〇余年の歳月を費やして新潟出身の歌人小川水明の歌集を編集されたことにも、先生の面目躍如としている。言語に関する情報と百科事典的情報を十分に統合した『広辞苑』的な露和辞典の編纂が先生のもう一つの夢だったのだが、それは不十分な形でしか実現せず、先生は夢を抱いたまま逝ってしまわれた。

和久利先生はツルゲーネフの詩「ロシア語」がお好きで、よく引き合いに出された。ナウカ社の「窓」一〇八号に載った先生の書評文の最後にもそれがあった。「《偉大な、力づよい、真実を語る、そして自由なロシア語》を学習する人たちが日本でも再び増えるような時代が早く来ることを祈らずにはいられない」。ロシアの現状を悲しみながらの結びの言葉だった。「ロシア語の使徒」とでも言うべき先生の姿が見える。

不肖の弟子としての深いお詫びと心からの感謝を込めて。合掌。（昭29年卒。東京外国語大学名誉教授）

四　翻訳

クプリーン『白いむく犬』（八尾直三郎と共訳）
　新教育事業協会　一九五〇年
スレプツオフ『困難な時代』　岩波書店　一九五三年
ゴーリキー『文学的慰み』　河出書房　一九五三年
ゴーリキー『文学論』（『世界大思想全集』28所収
　河出書房　一九五四年
ゴーリキー『文学評論』上（石山正三と共訳）
　（『ゴーリキー選集』13所収）青木書店　一九五五年
ゴーリキー『人々の中で』上
　（『ゴーリキー選集』10所収）青木書店　一九五五年
クプリーン他『野生の誘惑』　河出書房　一九五六年
キュヘリベーケル『詩人の運命他2篇』
ルイレーエフ『壁臣に寄す他6篇』
ベストゥージェフ『雲に寄す他1篇』
オドーエフスキー『プーシキンの詩に答えて他4篇』
（以上『世界名詩集大成』12所収）平凡社　一九五九年
ゴーリキー『人々の中で』（『ロシア文学全集』33所収）
　修道社　一九五九年
ユーリー・ダヴィードフ『十月革命と芸術』
　プログレス出版所　一九七〇年
ゴーリキー『どん底』旺文社　一九七三年
チェーホフ『下士官プリシベーエフ』（世界短編名作選
　ロシア編所収）新日本出版社　一九七六年
レオーノフ『コブイリョフの帰郷』（世界短編名作選
　ソビエト編所収）新日本出版社　一九七八年
ゴーリキー『二十六人の男と一人の娘』
ブーニン『日射病』
クプリーン『ルィブニコフ二等大尉』
ロマーノフ『うわみずざくらの花なしに』
ネヴェーロフ『飢え』
ピリニャーク『手についた土』
イワーノフ『乳のみ児』
（以上『世界100物語』4所収）河出書房新社一九九七年

府中だより
新キャンパスでの一年をふり返って

渡邊雅司

日本ロシア文学会総会・設立50周年式典を行なう

西ヶ原の旧校舎から超モダンな府中キャンパス（まだご覧になっていない方は是非今度のロシア会の折にでもお越しください。あまりの落差に驚かれるに違いありません）に移転してちょうど一年が経とうとしています。この間に大学全体もそうですが、ロシア語専攻（言いにくいですね。でもロシア語学科という名称はもう存在しないのです）にとってはとりわけ目まぐるしい一年でした。研究室の整理も終わらぬ11月11、12日の両日、日本ロシア文学会（会長は佐藤純一氏）の総会・研究発表会と懇親会が開催され、丁度設立50周年の式典も同時に行ないましたので、大学会館のダイニングホールと食堂は二百人を越す全国のロシア研究者や来賓でまさに立錐の余地もないほどでした。この時の記念講演では東郷正延氏と米川哲夫氏がユーモアたっぷりに学会の歴史やロシア語との関連で言葉遊びなどを紹介されました。事務局も担当しており、移転直後ということもあって、不備な点が頻出することを案じていたのですが、終わってみれば、これまでの学会の歴史のなかでもっとも盛況だったともっぱらの声。新キャンパスでの最初の全国学会ということで、おそらく大学史にも残ることでしょう。この時印象に残ったことは、ロシア文学会において果たした外語の役割です。このことは歴代の会長（八杉貞利、原久一郎、米川正夫、中村白葉、木村彰一、東郷正延、和久利誓一、米川哲夫、原卓也、佐藤純一）が原久一郎をのぞいて全員が外語出身者であること、また草創期の主だった会員が外語関係者（もちろん早稲田や大阪外語、天理などもありますが）だったということです。それにしても、いささか冒険的とも思えるイベントをやり遂げることができたのは、ひとえに学生諸君が薄謝にもかかわらず、献身的に受付、会場係などを担当してくれたお蔭です。大学院をめざす学生も多いので、こうした場に身を置くことは良い刺激になったことと確信します。しかし外語には機動性に富み、なおかつ知性溢れる応対をしてくれる学生（特に女子学生）が多いという伝説が生まれ、これが仇になったというべきか、学会は外語で、という風評がたってしまい、後述するように、さらに規模の大きい学会を引き受けることになってしまうのです。

和久利先生の卒寿の祝い

ロシア文学会の一週間後が和久利先生の卒寿の祝いを兼ねたロシア会の総会と懇親会。米寿の祝いを固辞された先生とは、もし生きていたら卒寿の祝いには応じるとの約束をかなり強引に取り付けていましたので、送迎を中村昌代さん（44年卒）にお願いし、酸素ボンベ（先生は長らく肺気腫を病んでおられました）を脇に置いての祝賀会となりました。ところが、いざ始まってみると、準備周到な先生は八杉先生によって基礎が置かれたロシア会の意義を40分程も話されたでしょうか。主催者としてはお体を心配してひやひやの連続でしたが、頭脳明晰な先生の口から、おそらく授業中には聞いたことのないような戦前のロシア会の様子が熱っぽく語られ（しまいには、酸素の管をはずしてしまった）、その情熱に全員が打たれてしまいました。本来ならば、この時の先生のお話を中心に、会報の特別号を編むつもりでいたのですが、それが今回の追悼号になってしまったことは残念でなりません。せめてもの慰めは、先生に新キャンパスを見て頂いたこと、卒業生、在学生と親しく話す機会を設けられたことでしょうか。亡くなられる一月ほど前に長電話をしてしまったのですが、その時もロシア会での挨拶を補うべく、戦前の「露西亜會報」のコピー（ご存知ない方が多いと思いますが、その頃の会報は雑誌で、卒業生、学生も積極的に参加し、極東、シベリア各地にロシア会の支部があり、そこからの地方通信は歴史資料として第一級の価値があります。八杉先生がバックナンバーを寄贈され、和久利先生がきちんと製本されて分厚い三巻本として資料室に保存されています）を取り寄せて、再精読されていること、また名著の誉れ高い「テーブル式便覧」の改訂版が出る話が進んでいるので、文法に関する新情報を注の形で入れたいので、パソコンの上手な学生を紹介してくれるよう頼まれました。弔辞のなかで東郷先生が言われたように、死の間際までロシア語のことを考え、調べておられたのですね。敬意をこめて合掌。

中野健三基金シンポジウム

12月5日には恒例の中野健三基金シンポジウム（94年にモスクワ留学中に事故死した中野君の遺族からのご寄付によって、毎年シンポジウムを開催しています）。テーマは「ロシア―国家論からの照射」ということで、高橋清治教授の司会で富田武（成蹊大）、中村裕（秋田大）両氏を講師に招き、これも多くの聴衆を集めました。

磯谷孝教授の最終講義

学年末試験に入る直前の2月2日には、停年退官される磯谷孝教授の最終講義が行なわれました。副手時代も含めるとほぼ40年間外語に在職された磯谷教授は、若い頃からロシア語学の分野で目覚しい成果をあげ、動詞の体の研究ではわが国屈指の碩学であり、独自の方法で編まれた「ロシア語作文教程」は私たち後進にとって非常に役に立ちました。その後研究社の『露和辞典』の編者として長年執筆されるかたわら、早くからタルトゥ学派の文化記号論に関心を寄せ、多くの評論も著してきました。そんな先生らしく、最終講義のテーマも「文化的無意識について」と、人を煙に巻くようなものでした。先生の意向もあって派手な宣伝は一切せず内輪で、と思っていたのですが、大教室を一杯にする聴衆がつめかけ、普段文法の大家としか知らされていなかった学生諸君は、ニーチェ、フロイト、ユング、ソシュール、レヴィ＝ストロウス、加えてロシア神秘哲学の系譜とまさに縦横無尽に20世紀を代表する思想家について語る先生の博覧強記ぶりに、度肝を抜かれたようです。つづくお別れパーティーは、客員教授のソローキン氏（日本での二年間の教師生活で小説家としておおいに霊感を受けたようです。映画も手がけている彼は、現代ロシアを代表する四人の作家として近々来日の予定）の送別会もかねて、生協食堂で開催、在学生、卒業生等百名前後集まり、お二人と歓談し、お送りしました。

市民学会「日本とロシア」

こんなことばかりしていたら、イベント屋になってしまうと、スタッフ一同焦燥感を抱き始めていたころ、ロシア東欧研究連絡会議（日本でロシア圏の研究をする五つの学会の連合体）の和田春樹、中村喜和両氏から、市民学会「日本とロシア」を開いて、現在の日ロ関係の改善、日本人のロシア離れを食い止めない限り、ロシア研究も育たなくなる、ついてはこれが出来るのは外語しかないと口説か

れて、断ることの苦手な私は渋々引き受けてしまったのです。開催日は6月23、24日、広く一般市民にも開かれた学会ということで参加自由、勿論無料ということでしたが、果たしてどの位の人数が集まるのか、いささか不安でした。また懇親会（二日連続！）参加者の予測がつかず、イベント屋もどきのわれわれも焦りました。しかし、案ずるよりは産むが易しで、延べ千人近い聴衆がつめかけ、しかも途中で席を立つ者もなく、九つのセッションと講演（辻井喬氏）が行なわれたのです。それはこれまでの学会では味わったことのない熱気、まるで異空間にいるような感覚といっても過言ではありませんでした。この学会では歴史畑の高橋、鈴木両先生の綿密な組織力とまたしても学生諸君の献身的な協力が光りました。なによりもかくも広範なテーマの学会に在学生が参加できたことは、これからの勉強の刺激になったに違いありません。

催事のことばかり書きましたが、これほど集中することは今後ないと思いますので御容赦。なお今年から、八、九月が夏期休暇となり、あの七月の猛暑のなか授業、試験とつづきましたので、今になってどっと疲れがでています。

今春卒業生の進路と在学生らのロシア留学

この不況のなか就職事情は良いとはいえませんが、マスコミ関係に進んだものが、例年になく多かったように思います。またロシア国立人文大との交換協定により、日本側から2名、ロシア側から1名の学生が派遣されました。しかし二年目からの予算措置の目途はついていないので、頭の痛いところです。今年も私費で留学するものが多く、三年生を中心に20名ちかい学生がすでにロシア各地の大学で学んでいます。治安の決して良くない現状なので、楽観論者の私ですが、今は彼らが事件や事故に巻き込まれないことを祈るばかりです。

（昭44年卒。東京外国語大学教授）

二〇〇〇年外語祭のロシア語劇

昨年の外語祭で、ロシア語劇は当初「ワーニャおじさん」を上演する予定だったが、外語祭開催ひと月まえに、急遽演目を変更、ヴァムピーロフ作「天使との20分」を11月23日に上演した。チェーホフの再来と評価されながら、一九七二年にバイカル湖でボートが転覆し、惜しくも夭逝したこの作家の作品は、一昨年も「長男」が外語祭で上演され、その一場面がロシア会の懇親会で披露された。

「天使との20分」

総合プロデュース・演出　岸本正寿

演出・舞台監督　山田智子

キャスト

ホムートフ　高橋勝己

アンチューギン　森　和子

ヴァシュータ　安部操佐

ウガーロフ　小林義知

ストゥパーク　大槻忠史

ファイーナ　佐藤祐美

バズィーリスキィ　池田友美

語劇が行われた大集会室は狭くて、劇の上演には設備も十分ではないのが、学生に気の毒だった。

会計から

ロシア会の会費は前回もお知らせした通り、年会費二千円（振込料70円）または終身会費三万円（振込料120円）となっており、納入頂いた状況は左表の通りで、ご支援の程感謝致します。しかし、納入人数はロシア会再興の四年前から数えても、終身会費を納入された方百六名、年会費を一回以上納入された方二百名という実態で、総数二千余名からみると非常に少なく、大部分の方が多忙のため、忘れていらっしゃるか、或いは、全体の同窓会である外語会への納入で済んだと思っていらっしゃるか、のいずれかと思われます。外語会とダブってのお願いで恐縮ですが、ロシア会の維持発展のため、よろしくご支援下さい。

（追伸）終身会費、または、数年先までの年会費納入済みの方には払い込み用紙は同封されていないと思いますが、もしあったら廃棄して下さい。

（井上　勝　昭25卒）

二〇〇〇年度終身会費納入者

（卒業年次順・敬称略）

貝沼一郎、上野忠則、木田利二、岡本　茂、新田　実、窪田　清、関根礼子、田村朋也、大森　正、渡辺晋太郎、元木都市男、鈴木康雄、大平和徳、菊谷大四郎、田尻　肇、小松あやめ、五十嵐修、中村昌代、石渡美砂子、古川早紀子、広辻ひとみ、門　更月、小倉かおる、岡野ちえ、平原静子、瀬戸はるか　以上

東京外語ロシア会2000年度収支実績

（2000年4月1日～2001年3月31日　単位　円、監査実施済）

1	収　入	~~懇親会~~会費（26名、単価3万円） 終身	780,000
		年会費（116名、規定単価2千円）	268,000
		寄　付	7,000
		懇親会余剰分	22,031
		利息収入	1,686
		合　計	1,078,717
2	支　出	二葉亭四迷道標代	30,630
		会報作成費（印刷製本他作業代）	210,787
		会報ラベル（支払い先　外語会）	17,300
		会報郵送費	151,060
		幹事会費	2,603
		雑費（払込手数料他）	4,325
		合　計	416,705
3	差引計算および繰越金		
		差引剰余金	662,012
		前期繰越金	2,632,390
		次期繰越金	3,294,402

ロシア会懇親会収支報告（2000年11月19日実施、単位　円）

（和久利先生卒寿記念祝賀会の収支を含む）

1	収　入	出席者の会費納入額（7千円×98名）	686,000
		祝金のみの払込（3千円×71名）	213,000
		合　計	899,000
2	支　出	先生への祝金（後日郵送分を含む）	213,000
		お花代	11,370
		料理代（支払先　外語生協）	525,000
		飲み物代（支払先　村野商店ほか）	106,155
		雑費	21,444
		合　計	876,969
3	差引余剰（本会計に組入済み、本会計収入欄参照）		22,031

「プーチンのロシア再見」

平野　裕

九月下旬、モスクワとキエフに行ってきた。ソ連解体から十年の歳月を経て、その歴史的な意味を探る思いもあった。

ところが、参加者都合で取材グループの編成に手間取り、ニューヨークの同時多発テロ事件の直後になった。モスクワに着いたら「外出の際にはパスポートを忘れないで」と注意され、テレビは早朝から南のアフガニスタン情勢をめぐる緊迫を伝えていた。

ロシアの対応はチェチェンの経験もあって、実に素早く、水際立って見事だった。二年前のちょうど九月、深夜の大都市で高層住宅ビルが爆破され崩壊し、多数の死傷者が出るテロが連続して起こった。当時首相だったプーチン大統領はただちにチェチェン人の犯行と断定し、同共和国に大軍を投入して制圧、その断固たる決断は彼の人気を急上昇させた。

同時多発テロに対しても各国首脳に先駆けて「米国は國際テロから未曾有の侵略行動に直面した。これは全人類に対する厚顔無恥の挑戦である」と声明、二週間後には米軍事行動への明確な支持を約束する一方、チェチェン反乱勢力に和平条件を突きつけた。

一年ぶりのモスクワは前にも増して明るく、活気に満ちていた。世界の先進国が不況下にあるなかで、ここは好景気で賑わっている。

トヴェリ大通り（旧ゴーリキー通り）では頭上に横断幕が何本もはためいていた。かつての「万国の労働者よ団結せよ」というスローガンが新商品やレストランの宣伝文句に変わった。市内いたるところで横断幕の広告が氾濫していた。かってバザール経済と嘲笑的になった露天キオスクも影をひそめ、気品と風格を備えた都市に生れ変わりつつある。

トヴェリ（旧ゴーリキー）通りには何本もの横断幕がはためいている。

市内の超大型スーパー「ラムストル」は東京有明の国際展示場大ホール位の広さだが、店内の熱気には圧倒される。いま日本で買える物でモスクワに無い物はないといって良い。

買い物カートに山と積んだ食料品を運ぶ幸せそうな夫婦子供連れの姿はアメリカの生活風景と見間違えるかもしれない。

私達が泊ったホテルは中クラスだったが、この一年で内部はすっかり綺麗に改装されていた。「環境保護にご協力を」と宿泊客に具体的な方法を要望しているのは、ホテル経営を経験した私にはとくに感慨深かった。

ソ連解体後、十五共和国の経済共同体がバラバラになり、縮小した各国経済は徐々に回復し始めている。ロシアでも昨年に続いて今年もGDP（国内総生産）は4から8％の上昇が見込まれている。

ただその好調の原動力がロシアの場合は生産力の向上というより原油価格の好況によるものであることはまだ手放しの楽観を許さない。それでも政治の安定と消費意欲の高まりはロシアの自信回復と無関係ではない。

超大型スーパー「ラムストル」のレジがずらりと並ぶ光景は壮観だ

プーチン改革はあらゆる分野に及んでいる。税制、司法、年金、労働、軍事、土地、行政、教育、銀行など、日本の小泉改革顔負けの多岐にわたっている。ソ連解体後のエリツィン時代は共産党独占の国有財産をノメンクラツーラ（ソ連時代の特権階級）中心に山分けした混乱期だったとすれば、プーチン大統領は市場経済の法制度でそのワク組みを吊り上げる役割を担っている。

その多分に保守的な改革は成功しているが、大国ロシアの威信復活を急き過ぎて、人権や自由が圧迫される局面も目立つ。チェチェン戦争に駆り出された若者を、軍隊のしごきや戦場の過酷な状況から守る「兵士の母の会」には大勢の母親や青年が相談に訪れていた。今年はすでに千八百人が来たという。

改革最大の被害者は新聞、テレビのマスメディアだ。人気最高のラジオ局「モスクワのこだま」では幹部スタッフが全員辞表を出す騒ぎの最中である。日刊紙「セヴォードニヤ」が廃刊、独立テレビ（NTV）は社長以下幹部が総入れ替えになった。いずれも政府系企業が大統領府の後押しで株主権を行使して乗っ取りを計っているためだ。それでも巷では「君側の奸」が入れ知恵しているというプーチンびいきの見方が流れていた。

一年前、モスクワで驚いた日本料理屋の盛況ぶりはさらに進んでいた。「スシやテンプラなど日本料理をメニューに加えたレストランを含めると千数百軒あるようですよ」と在住日本人が教えてくれた。

しかしそうした日本ブームとは裏腹に一向に良くならない日ロ関係に知日エリート達は一様にいらだちをつのらせている。外務省のロシュコフ次官（対日担当）は「日本側は一体何を考えているのか分からない。日ロの領土交渉も今のような状態が続いたら、今後数十年立っても日ロ関係は悪くなるだけだ」と歎いていたし、米・カナダ研究所のノーソフ副所長も「私は日本が好きだが、日本でいま起こっていることは全く理解できない」と絶望的な言葉をもらした。

今年七月にはモスクワで中ロ友好条約が調印され、アジア情勢も急展開の兆しをみせているのに、日本の外務大臣は「一九七三年の田中角栄首相訪ソの原点に戻るべき」などとてんでピントはずれなことをいう迷走ぶりに戸惑っている様子がうかがわれた。

日本語熱も盛んだ。私立のモスクワ外国語大学を訪ねた。タタール出身の女性学長が

「ヤキトリ」という日本料理屋チェーンはモスクワで大繁盛

一九八九年に生徒一人の個人教授から始めて、いまでは学生千人、教師四百人の名門新興大学にのし上がった。すでに在日大使館にも卒業生がいるし、この春に任期を終えて帰国したシェフチュク参事官の娘さんが日本語科に在学していた。三十数人の学生達は目を輝かして私達と日本語で話した。

「就職出来るでしょうか」という問いに答えに窮した。「日ロの間はどうしてこうまくいかないのか」と心が重かった。一緒に旅した団長の小田健氏（昭和48・日経論説委員）中沢孝之氏（昭和36・長岡大教授）もきっと同じ気持ちだったに違いない。（昭23年卒。元毎日新聞モスクワ特派員・編集局長・主筆）

垣根を越えた「市民学会・日本とロシア」
母校・府中キャンパスで

大熊秀治

「日本とロシア―歴史・交流・共生」をテーマにした研究者と市民の集い「市民学会」が、さる6月23～24日に東京・府中市の東京外国語大学新キャンパスで開かれ、盛況だった。

わがロシア語同窓諸兄姉も積極的に登場。「歴史」のセッションでは、明治期にロシア人教師を受け入れた東京外国語学校について渡辺雅司・東京外国語大学教授（昭44年卒）が、大正期にロシアに在住した日本人について左近毅大阪市大名誉教授（昭37年卒）が研究の成果を発表した。

「交流」のセッションでは、小林和男・元NHKモスクワ支局長（昭38年卒）が特派員の経験を、村田真一・青山学院大助教授（昭58年卒）が通訳者としての苦心談を披露した。さらに、小川和男・ロシア東欧経済研究所長（昭36年卒）、杉本侃・経団連日ロ経済委員会事務局長（昭42年卒）が日ロ経済協力の現状について述べた。

一方、芸術部門では、中本信幸・神奈川大教授（昭30年卒）が演劇の交流事情を報告。亀山郁夫・東外大教授（昭47年卒）が司会した「共生」のセッションでは、通訳やエッセイストとして名高い米原万里さん（昭50年卒）が、ロシア語とともに歩んできた半生を語った。

卒寿に達せられた東郷正延先生が終始熱心に聴講されていたのが印象的だった。

この学会のより大きな意義は、旧ソ連に対する評価をめぐって二分されていたロシア・東欧地域の研究、交流の六団体が、一致協力して開いたところにある。

その会場を、東京外国語大学が引き受けたことも象徴的である。懇親会の挨拶で中嶋学長が「この府中キャンパスは地域社会と同化するコンセプトでつくられ、門も塀もない」と強調されたが、まさに〝垣根を越えて〟の集まりに、これほど相応しい場はなかった。（昭31年卒。元東京新聞モスクワ特派員・論説委員）

聴衆で一杯の会場―パネルディスカッション「私とロシア」

アドリア海（クロアチア領）再訪

吉成大志

今夏、療養をかねて4週間、アドリア海（クロアチア領）で過ごしてきました。一九六七～七〇年の東欧特派員（NHK）時代、二人の娘たちと泳いだところで、30年ぶりの訪問です。

高温多湿の日本を脱出し、アドリア海の乾燥した海の風にあたり体調を整えるのが目的でしたが、まあ、一言で言えばセンチメンタルジャーニーというところでしょうか。

ボスニア・ヘルツェゴビナ戦争でセルビア人過激派と戦った傷跡がまだ残っている所もありましたが、クロアチア人たちは中世以来の、ヴェネツィア、オスマントルコ、ハプスブルク、イタリア、セルビア等の支配から完全に独立した喜びを謳歌しているようにみえました。ミロシェビチ元セルビア大統領がハーグで国際裁判にかけられていることや右翼偏狭ナショナリストのトゥジマン前大統領が死去したことでクロアチアのヨーロッパ社会への回帰が決まったことなどが人々を安心させているようでした。

クロアチア第二の都市スプリットとトローギル島はユネスコが世界文化遺産に指定した街で、古代ローマの遺跡、ディオクレティアヌス皇帝（245～313AD）の宮殿跡、オスマントルコとの戦いの跡などが見事に保存されていて、その宮殿跡で催された夏の芸術祭でヴェルディのREQUIEMが演奏されたときは千七百年を経てなお神殿柱廊に立つ円柱を見ながらの幻想的な雰囲気も手伝ってか、深い感動を覚えました。アドリア海は海水の透明度が抜群で海辺の松林も美しく、日中の太陽光線は強烈でしたが、松林の影に入るとひんやりとした乾いた海の風が吹いてきて心地よく、いつまでも去りがたい思いでした。一昨年滞在した南仏カンヌとニースの汚れた海岸を思い出し、アドリア海の環境保全の大切さを痛感した次第です。

透明度抜群のアドリア海―ブレラにて

30年前、ベオグラード（ユーゴスラビア連邦兼セルビア共和国の首都）で覚えたセルボ・クロアト語を役立てようと現地に着くとすぐに辞書とクロアチア語会話辞典を買い復習を始めた甲斐あって、ここに来た日本人ははじめてだ、どこで勉強したのか、発音が自然だ、などと褒められましたが、うっかり「ベオグラードで」と答えれば袋叩きにあいそうな気配なので返事に困りました。5年前、リュブリヤナ（スロベニアの首都）を訪れたときも、いかにセルビア語と気づかれないようにスロベニア語を発音するかで苦労しましたが、一九六八年のチェコ事件取材では絶対にロシア語を知っていると感づかれないようにチェコ語を話すのがどれだけ難しかったか、ロシア科卒業生は各所で思わぬ苦労をするものです。

（昭28年卒。元NHKモスクワ支局長。東外大講師）

二〇〇一（平成十三）年度

ロシア会総会・懇親会のお知らせ

今年のロシア会総会・懇親会を左記の要領で開催いたします。一年に一度の集まりです。お誘い合わせのうえ、多数の方がご参加くださいますよう、ご案内申し上げます。

日　時　11月24日（土）
午後1時30分から総会
午後2時30分から懇親会

会　場　総会は研究講義棟一階　一〇二号室
懇親会は大学会館一階食堂

懇親会の内容
講演「尺度を変えて世界を見る
～対米テロの背景～」
講師　小林　和男氏（昭38年卒）
（NHK解説委員・作新学院大学教授）
懇談・アトラクション

会　費　七千円（学生は無料）

なお、当日は外語祭の期間中です。ロシア語劇はロシア会の翌日、11月25日（日）の最終時程にチェーホフの「かもめ」を大学会館大集会室で上演するそうです。

東京外国語大学案内図

西武多摩川線多磨駅下車徒歩5分
改札口（一ヶ所）を出て左に少し歩くと地下道があります。地下道を渡って道路に出ると前方に研究講義棟の上部が見えます。
京王線飛田給駅からは徒歩25分　タクシー利用で5分
東京外国語大学前で停まるバスもあります

【所在地】
〒183-8534
東京都府中市朝日町3-11-1

編集後記

◇昨年、和久利先生の卒寿をお祝いしたロシア会で先生は「これまでこのような祝いの会は辞退してきたが、今日は皆さんに感謝と別れの挨拶を言うつもりでやってきた」と前置きささって、ロシア語をまじえながら、実に客観的にご自分の病状を説明なさったあと、戦前のロシア会の活動について、八杉先生のご指導のもとに学生があの時代にロシア会でなければ出来ない勉強をすることができたと述懐され、ゴーリキーの「どん底」の初演の演出に触れてルカーの台詞を引いてお話になるなど、非常に印象深いご挨拶をなさいました。それが本当に告別の辞になってしまったことは残念です。そして、それを録音する用意がなかったことを先生に申し訳なく思っています。断片で結構ですから、あの時の先生のお話で記憶に残っていることをお寄せ頂けないでしょうか。

◇お忙しいところ、原稿をお寄せくださいました方々にお礼を申し上げます。

◇昨秋は一面にコスモスが咲いていた所に事務棟が建築中だったり、最寄駅の名が「多磨」と変わっていたり、キャンパス周辺の風景も変わりました。（町田裕子　昭34卒）